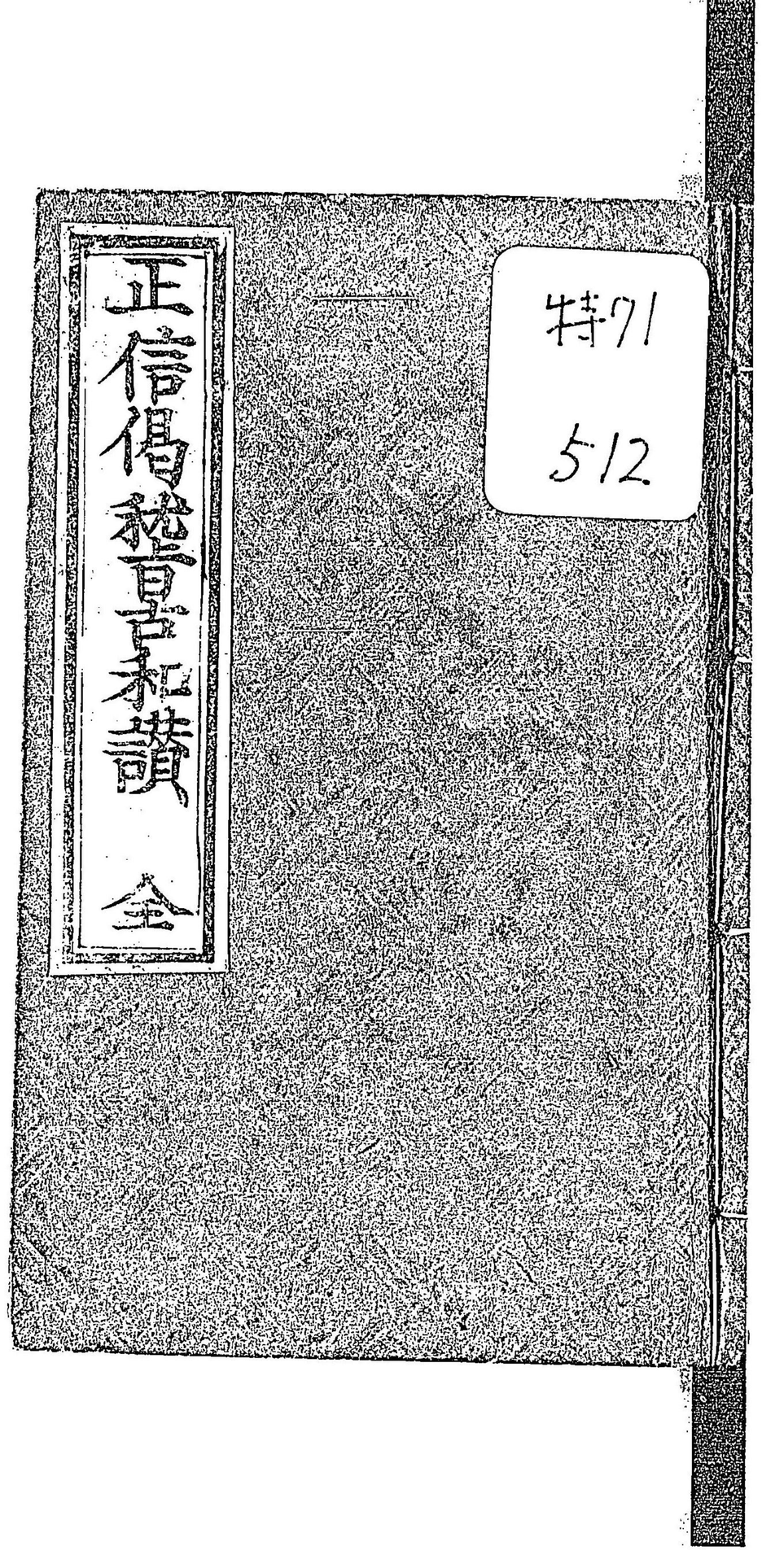


300940-000-7

特71-512

正信偈稽古和讃

平沢　潤助／校

M19. 9

ABA-0039

歸命无量壽如來
南无不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

特71
512

昭十九年十月十九日内務省令第
1201

52.6.9
77W21724

覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立无上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无导无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵刹
一切羣生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時羣生海
應信如來如實言
能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊迴入
如衆水入海一味

攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋僧之雲霧
常覆真實信心天
譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華
彌陀佛本願念佛
衆見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機
釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念弥陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願

廣由本願力廻向
爲度羣生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數

得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死園示應化
本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解

報土因果顕誓願

往還廻向由他力

正定之因唯信心

惑染凡夫信心發

證知生死即涅槃

必至无量光明土

諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散与逆惡
光明名號顯因緣
闡入本願大智海
行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍
即證法性之常樂

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲无倦常照我

本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世

還來生死輪轉家
決以疑情爲所士
速入寂靜无爲樂
必以信心爲能入

弘經大士宗師等
極濟无邊極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

一弥陀成佛のこのかたい
まゝ十劫とへてまへり
法身の光輪きらもなく
世の盲冥照らしてけり

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

智慧の光明とろかす

有量の諸相とどくべからず

光暁かぶらしめるものなり

上

真實明に帰命せよ

重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

解脱の光輪をはなつ

光触かぶるものをみな

有无をえらばずすくふ

上

平等覚に帰命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

光雲无导如虛空
一切の有导ふさりなり
光澤かぶらぬものぞなし
難思議ゝ帰命せよ

上

二重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

佛光照曜寶第一

光炎王佛とぶつけ奉る

三塗の黑闇ひらくなり

大應供成歸命せよ

中

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

清淨光明ちうびなり
遇斯光の色多彩まで
一切の業繫ものぞことゝ
畢竟依を歸命せよ

下

願以此功德
平等施一切
同發菩提心
往生安樂國

二

道光明朗超絶せり

清淨光佛とまうすう

ひとたび光照かぶるゆ

中

業垢とのぞこほ解脫をう

慈光をかぶるがゆゑに

ひるがへしいたるところに

法喜をうとそのべたまふ

中

大安慰にして歸命せよ

无明の闇を破るゆへ
智慧光佛とまうけり
一切諸佛三乘衆
上 ともに嘆譽たまへり

光明てらしたへぞれば
不斷光佛とたづけり
聞光力のゆへなれば
上 心不斷にて往生を

佛光測量すべからざる

難思光佛とたづけたり

諸佛へ往生嘆じつ

下弥陀の功德と稱せしむ

神光の離相とぞうべし

无礙光佛とまうけたり

曰光成佛のひかりなり

中諸佛の嘆ずるところなり

二光明月日勝過して
超日月光のとおがけてり
釋迦嘆じてそのとうれを
上　无等等と歸命せよ

弥陀初會の聖衆の
筆數のおよぶことをえた
淨土を称ずうんひらみる
下　廣大會に歸命せよ

安樂无量の大菩薩
一生補處にいるる形り
普賢の德に歸してぞ
穢國かりそめを化するゑ

下方衆生のためにぞ
如來の法藏あらわしぞ
本願弘誓に歸せしむる
大心海に歸命せよ

觀音勢至もゆるとゆ
慈光世界を照曜し
有緣は度しそなはる
下
休息あることをうる
安樂淨土にいたるひと
五濁惡世にかへりては
釋迦牟尼佛のごとく
下
利益衆生すべしと

神力自在なること
測量そこそこなき
不思議の徳とあり
上
无上尊に歸命せよ
安樂聲聞菩薩衆
人天智慧ぞうかれ
身相莊嚴みなおなじ
中
他方に順じて名とつね

顔容端政たぐひなし

精微妙軀非人天

虛无之身无極體

上 平等力と歸命せよ

安樂國に往ぐふひと

正定聚にこそ住とうを

邪定不定聚くふなし

上 諸佛讃嘆したまふ

十方諸有の衆生へ
阿弥陀至徳の御名とき
真實信心いたりたへ
かたきを所聞と慶喜せん

上

若不生者のたまうひも
信樂まことたにいたり
一念慶喜するひとへ
往生かをさだまるな

中

安樂佛土の依正へ
法藏願力のあらはるる
天上天下にたぐひなし
中大心力に歸命せよ

安樂國土の莊嚴へ
釋迦尤身のみことにて
ことごとくたづとのべたまふ
上无稱佛に歸命せよ

已今當の往生と
この土の衆生のこゝろを
十方佛土よりさゝる
上无量无數不可計多

阿弥陀佛の御名とき
へ歡喜讃仰せしむるに
功徳の寶は具足して
一念大利无上なり

たとひ大千世界の
みてらん人とも
佛の御名をきくひと
ふかく不退ならん

上

神力无極の阿弥陀へ
无量の諸佛ほめたまふ
東方恒沙の佛國より
无數の菩薩ぞきたる

中

五十六億七千萬

弥勒菩薩いまだ人

まことの信心するひと

このゆえをもってなり

念仏往生の願によって

等正覚にいたるひと

をすなわち弥勒おなじく

大般涅槃をさとるべし

真實信心うるゆへに
とゝのへち定聚に入ねとも
補處の弥勒におなじ
无上覺をさとるなり

像法のとしの智人も
自力の諸教とこなを
時機相應の法なれは
念佛門にそなはらす

弥陀の尊號をたんぜ
信樂まことにるもとと
憶念の心は称名として
佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の
選擇本願信ずるべ
不可稱不可説不可思議の
功徳の行者は身みつ

●本師龍樹菩薩へ

智度十住毘婆沙等

「引」

ひたくまておろく西とはら

「念佛せしむる

もゝ久て念佛せしむる

南天竺に比丘わらん

「龍樹菩薩とあたゝ

「有无の邪見と破し

「世尊へ給てとゝ久ゝ

本師龍樹菩薩の
大乘无上の法ときて
觀喜地と證したる
とゝを小念佛とゝなる

龍樹大士世にいでゝ
難行易行の道ひらく
流轉輪廻のとゞまらば
弘誓たのみなしたまへ

本師龍樹菩薩の
おしへにしたがひて
本願心にうけしめて
他力弥陀と稱せし
不退ぜんとおもふべし
ゆゑに
ぐんとおもうんひとへに
恭敬の心に執持して
弥陀の名號を稱すべ

南无阿弥陀佛の廻向の
恩德廣大不思議かて
往相廻向乃利益にへ
還相廻向ふ廻入せり

往相廻向の大慈より
還相廻向は大悲から
如來乃廻向ばかりさ
淨土の菩提へいざせん

弥陀観音大勢至

大願のふねに乗じて

生死のうみにうかべ

有情をよそのがれず

弥陀大悲の誓願は

ふかく信ずるひとをみそなはす

称名をもつてもつぱらとして

南无阿弥陀仏とぞ

他力に信心うるひとは
いかでか
うやまひおそれふかくして
ものくちもとの親友を
教主世尊なりたまへり

如来大悲の恩徳は
身骨粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ゆめゆめ忘るべからず

改悔文

そろくの雑行雑修自
力ゝ心をすてゝ一心に
阿弥陀如来我等が今度
の一大事の後生御たすけ
候へとたゝくりしで候

たのむ一念の所に往生一定
御助け治定とぞんじたてまつ
り称名ハ御恩報謝と
よろこびまゐらし候ハの御と
聴聞まゐらせ候こと
御開山聖人御出世ハ御恩

次第相兼の善知識のなさうら
ざ候御勧化御恩ありがたく
候このうへさらにとゞまる
る御おきて一期ばかりの
まうしつぎとゞく候

末代愚智の在家止住の男女たち
ともかくもこゝろをひとつにして阿弥陀
佛をたのみまゐらせてこゝに餘の
へ事をまうさん一心一向に佛たすけまゐ
まうさん衆生なれば罪業の深重なり
ともうすに弥陀如来をたのみまゐらせ

べしとれたまう第十八の念佛往生の誓願
せまうたりかくのごとく決定したまへる
称ともえんてもいのちのあんぎりへ
称名念佛とぞたりのあるあるべく
それ八万法藏をまうくまうも後世と
をもうぐる人と愚者とをもうくまうに一文不知の
尼入道もありとうとも後世ぞをもる智者
をもうくまうくべ當流のをもうくまうる
がうくまうくに聖教とをもうくまうの義をもう
ありとうとも一念の信心をもうくまうと
ぞ人をもうくまうくまうくまうくまうぞ

聖人の御ことばなれば一切男女たりん身へ
弥陀の本願と信ずべきなり凡そ
とくとくなるべきなり
ゆへいかなる女人あるとも
雑行をすて一念弥陀如来今度の
後生たすけたまへと申さん

人へ千人も百人もみなもて弥陀の報土
に往生をとげた事をくくぶいのうく
うくるものなりかくく
夫在家の尼女房たん身へもよのもう
もおく一心一向に阿弥陀佛とたのま

きらうをして後生をたすけさせんと申さん
人ぐまなく御ぐそくあるべしとおもひ
とりてきらふこころの心もなくあさからぬ
こんぜをもつて弥陀如來の御ちかひの他力
本願をもつて申ばかりなる人をを後生の
たすけさせんとおもふべき歟

思ひたつ南无阿弥陀佛くぞ
とるべきなりのおもうあるべく

抑男子も女人も罪のふかきもかるべ
諸佛の悲願とたのまれまゐらせ時分に
未代悪世なれば諸佛の御ちかひにて申

かたんざる時あり是をよりて阿弥陀聚
と申奉るへ諸佛おもとれて十惡五逆の
罪人とをれをとけんとらく大願とおもし
まくと阿弥陀佛とおもう給へりをた
佛とふくたのをて一念御をけ候へと申
さん衆生とをれをとけすべ正覺をうしと

ちをいをーはを弥陀をれを我等を慈
悲て往生せんをと願ををーこ此
ゆくを一心一向を阿弥陀如來たとけ給へ
とふく心をうをづ信じて我身の
罪のふくを事をとをちをて佛をまを
はいをもて一念の信心ををまんをを

十人は十人まで百人は百人まで
浄土往生疑ひなき事なり
こゝをもつてこゝろをおもひたてまつ
らん心のおこるとき南无阿弥陀佛
くと時をもつて所をもつて
念佛申べきなり佛恩報謝の
念佛と申すなり〳〵

信心獲得とは第十八の願をこゝろ
ゑこの願をまうすには南无阿弥陀佛
のこゝろをこゝろうるなりこの御名南无の帰
命する一念なり發願廻向のこゝろ

あらゆるしてまことをもち弥陀如来凡夫を
廻向したまへばなりこれを大経に
へ今諸衆生功徳成就とときたまへり
无始以来たくわへつくる悪業煩悩とのこ
るところもなく願力不思議をもつて消
滅したまひぬゆへに正定聚不退の位
おのおのとまりてこれをもつて煩悩を断ぜず
そこ涅槃をえしめたまへこのこころは此義
に當流一途の聞談するのなり他流の人は
對してかくのごとく沙汰めさるべきなり聞ずう
能〳〵ゆめゆめこれをもつてのほかなるべしく

聖人一流の御勧化おもむきは信心を
もつて本とせられ候そのほかは
雑行をすてて一心に弥陀に帰命を
たてまつり不可思議の願力をたのみ奉り
ほとけのくに往生を治定せしめたまふなり
一念発起入正定之聚とは禅定の人は
称名念仏は如来より往生をさだめ給
へる御恩報謝の念仏とこころうべきなり
あなかしこ〳〵
抑當流の他力信心はいかなるを聴
聞して決定せしむる人をもつてその信心の

通とのそ心底ふかあとをたく他宗他今
對して沙汰をぐらぐまる路次太道れ
くれ在耶そもたつるを人どもをぐうち千
をと讃嘆をとをりいつを今讃地頭方
にしたてわをを信心をえうといひて疎畧
乃儀もいよいよく公事ををしをべース

諸神諸佛菩薩ゑもおろそかををを
ををみを南无阿弥陀佛の六字ばかりに
みもとろゆめもつををふ外ふ王法をもって
おもてと内心を他力信心をたくをくて
世間の仁義をもって本ををべしをれをる
ゆ当流をぐもるをとをの掟のおもむき

あつとこそうべきものかなとぞ

文明六年二月十七日書之

抑毎月両度乃寄合の由来ハ

なをでといふこさん他のとふあらば

自身ハ往生極樂乃信心獲得の

こゝろをもつてゆへ往古より

いまゝいるまでも毎月の寄合と

いふことハいかくにもくまあるといく

ともさゝふ信心の沙汰をかつて

もてこれあ〜こゝふ近年ハ何ゝ

寄合のとゝ〜ぐ酒飯茶ばんと

だらうまてみるべく退散でろうこれへ
佛法は本意をえるべきうべきうべきうべき次第
あるいはふも不信心の面々へ一段の不審
をもたて信心は有无と沙汰をぶた
とこ所かるるの所詮も形く退散せしむ
条ゝるべかゝれおぶくへそんぐるはくく

思案をめぐらんぐたことあり所詮
自今已後よもんてへ不信心の面々をひ
たぐひよ信心は讃嘆あるべくたこと肝
要あり
そもゝ當流の安心はともむにとゝいへ
あるぐちふとぐ身の罪障のまこと

ようくとぞんくの雑行のこころを
やめて一心に阿弥陀如来に帰命して
今度の一大事は後生たすけたまへと
ふかくたのまん衆生をばことごとくたすけ
たまへりとさにこそうけたまはるべ
きにかくはべりけるうへは
まことに百即百生なるべきなり
にて毎月の寄合はいとしてもて報恩
謝徳のためばかりなれば真実の
信心を具足せざる行者もあるべ
しとぞおぼえ候
明應七年二月九日　書之

毎月両度講衆中へ

八十四歳

夫人間の浮生する相ちらく観ずるに
おほよそそんらゐたるものこの世の始中終
はほ已のごとくなる一期なりさんべいまぐ
万歳の人身をうけがたく事ときぐすう
一生ときだにやすしいまふいたりて
たまたま百年に形躰とたりがたし我や
さいに入やすきけふこころもも
ちまたとそれぞれ行人とこのごと
ときの露よりもあだしらさんべ

朝は紅顔ありて夕べは白骨となる
身なりとぞ思ふ無常の風きたりぬれば
ものいはぬ骸となりてふしまろがれ
ぬ。されば人間の浮生をくらぶれば
幻のごとしなほ願をなして命を
ねがふべし

かなしきかな男女ともに悪業をのこす
ことなし。されば朝に紅顔ありて
夕べには白骨となる事をあらはすに
ひとしかるべし。況んや野外に
をいてをや。夜半に及んで思ひをなす
べきなり。されば白骨の身をあらため
中ごろの人間のさかひを
事とする者少不定のさかひなれば
いつれの人も

くやく後生の一大事ぬ心ゑかけて阿弥
陀佛とふくたのまらせさく念佛
ゐうすだたりれたりあるらん

抑當國摂州東成郡生玉の庄内
大坂とゝ在所へ往古よりゐる

約束のゐりけるやうなる明應第五の
秋下旬ゑよりかりそめあるこゝろ
在所とみそゐーしうとゝだにくれどく
一宇の坊舍ゑ建立ヤしゐ當年ハくや
ゝとゝ三年ゑ歳霜をてゝりきこゝま
すゐくち往昔の宿縁あさらる因縁

ゆうとおぼしくんごりぬそれ不うんこの
在所ゑ居住せむる根元ハゆゑゑ不一生
涯をあらうやくすし榮花榮耀哉
てれくまくゝ花鳥風月ともうとよゝ
あくれ無上菩提のたゆゝ信心決定の
行者も敏ゑ昌せしめ念佛ともまうさん

ともがらも出來せしもるゆうゑ不ひまと
おりゝ一念ゑおろばしとはこぶだうゆう
まくいさくらも世間のゝ人ちんども偏執の
やうもつりむ同じく題目ゆんども
出來あうんとゝいまてみやうふこゑ在所
とひて執心のこゝゑとやめて退出さぶん

ものたりてこれをよろこびていよ〳〵貴賤道俗を
ゆるがす金剛堅固の信心と決定せしめん
ゆゑにまことに弥陀如来は本願をあひうるゆゑ
別して聖人の御本意をたがへぬべき
ものの欲をすすめつゝ愚老とともに当年より
八十四歳まで存命せしむる条不思議なり

まことに当流法義にもあひがたき法は
あひがたく本望のとをりあきらかなる
ものの欲をすすめば愚老当年は夏ごろより
遠例せしめていまゝ本復たゞさ
へ那はたらゆゑ当年寒中にいかなる
往生の本懐をとゞめ条一定とおもひ

たんべりあんまく存命のうちこそ
信心決定のもかど朝夕ありしはんへる
まてゆ宿善まるをこそいひぐり述懐の
こんこんぐくもやむことをしてこれ
在所ゆ三年ゆ居住をゆるくの甲斐も
ありゆべしゆいかゆくこの一七ケ日

報恩謝りくらゆふとして信心決定ありて
我入一同ゆ往生極楽ゆ本意とぞ
たぎゆぐたりのちゆわるゆくらく
明應七年十月九日ゆりゆ
こゝゆよりみく入ん信とそれ
ぐくたことのちゆ

太子七高僧之御忌日并本願寺御代々御忌日

聖徳太子　二月九日
龍樹菩薩　十月十八日
天親菩薩　三月三日
源空上人　正月九五日

曇鸞和尚　五月廿六日
道綽禪師　四月九七日
善導大師　三月九七日
源信和尚　六月十日

親鸞聖人

一　信如上人　弘長三年十月廿日御入滅　浦九十歳　弘安二年正月廿日　八十三歳　壬

二　覚如上人　観應二年正月廿日　八十二歳　壬

三　善如上人　康應元年二月廿日　五十七歳　酉

五　綽如上人　明徳元年閏十月廿日　四十四歳　壬

顕如上人　文禄元年十月廿日　五十九歳

准如上人　寛永元年十月廿日　五十四歳

良如上人　寛文二年九月廿日　五十歳

寂如上人　享保十年七月八日　七十三歳

任如上人　元文四年八月六日　六十七歳

| | | | |
|---|---|---|---|
| 六 | 巧如上人 | 永享十三年十月廿日 六十二才 | 湛如上人 寛保九年六月八日 二十七才 |
| 七 | 存如上人 | 長禄元年六月十八日 六十三才 | 法如上人 寛政元年十月廿日 八十三才 |
| 八 | 蓮如上人 | 明應八年三月廿五日 八十五才 | 文如上人 寛政十二年六月廿日 五十六才 |
| 九 | 實如上人 | 文永五年二月二日 六十八才 | 本如上人 文政九年十二月十三日 |
| 十 | 證如上人 | 天文元年十月十二日 三十九才 | |
| 十一 | 教如上人 | 慶長九年十月廿日 五十七才 | 一如上人 元禄十三年四月十三日 五十二才 |
| 十二 | 宣如上人 | 万治元年七月九日 五十五才 | 貞如上人 延享元年十月廿日 六十三才 |
| 十三 | 琢如上人 | 寛文十年四月廿日 四十七才 | 從如上人 宝暦十年七月十日 四十五才 |
| 十四 | 常如上人 | 元禄七年五月廿日 五十四才 | 乘如上人 寛政四年五月九日 四十九才 |


明治十九年三月一日出版御届

同　年九月出版

定價金七錢

校正兼出版人　福井縣士族　平澤潤助

越前国足羽郡福井佐久良下町廿七番地

无明の闇を破るゆへ
智慧光佛とまうけり
一切諸佛三乘衆
上ともに嘆譽したまへり

光明てらしたまへばなり
不斷光佛とまうけり
聞光力のゆへなれば
心不斷にて往生す
上